

読解!

黄色い人

—遠藤周作の初期短編作品を紐解く

面白いんだけど、難解だから埋もれて
しまった可哀想な作品をサルベージ。

誰でも理解して楽しめるようにガイド
します。読書感想の参考にもどうぞ！

無頼流似非文筆書評家

平塚 白鴉

○ はじめに

作家・遠藤周作には隠れた傑作が存在する。

小説としては面白いのだが、物語の構成が複雑なために、全体像がつかめず、読後もスッキリとした気持ちになれない作品でした。

学生のころに一度読み、その時も理解することができず、数年後に読めばきっと理解できるはず。そう思って本棚に置いていたこの作品。残念ながら今回読み返しそれを理解することができませんでした。一瞬、また数年後に読み返そう、そうすれば理解できるかもしれない。そう思いましたが、それだときっと未来も同じことが起きるでしょう。

いったんここで情報をまとめ、じっくり読み説き、物語の全体像をあぶりだしておくことも面白いかもしれない。そう思い、さらにこまかな情報をメモ用紙に書きだし、時間軸を整理し、人物の相関をまとめ、物語の全体像をあぶりだしました。

漫然と読んでいたのではよくわからない主人公たちの行動、物語のくだりも、ささいな情報も逃さずに読み起こしていくことで、穴だらけだった物語の概略が、確かな立体感をもった一連のストーリーとして浮かび上がってきました。

よくわからなくても、そこそこ面白い小説でしたが（そこに含まれる主題が興味深く、単発的にショッキングな内容を含んでいる）、それらが有機的につながることで、それぞれの主人公たちの行動、事件の背景がみえてきて、さらに新たな謎、それに対する答えも見えてきました。

このたび誰でも「黄色い人」が楽しめるように、どこよりも丁寧かつ親切なガイドを書いていきたいと思います。マイナーな小説であり、簡単な解説しか書かれたことがない小説でしょうから、恐らく唯一のガイドとなると思います。

一部の知識人が楽しむにはもったいない、すぐれた小説でありながら、遠藤周作の初期作品として未熟さ（狙いでもある）ゆえに万人への支持が得られなかった隠れた名作。

稚拙ながらも遠藤周作への今までの敬意を表し、上梓いたします。

● 目次

- はじめに
- 目次
- 登場人物
- 時間軸
- ストーリーガイド（Ⅰ）
- ストーリーガイド（Ⅱ）
- アクトガイド
- リドルガイド
- おわりに ～～楽しみ方ガイド
- おまけ ～～課題と押さえておきたい矛盾点
- <付記>

○ 登場人物

・千葉ミノル

主人公。四谷の医学部学生。医者のためご。千駄ヶ谷の下宿で血痰を吐き、それ以来自分の命は長くないと知る。

子供のころに背教者デュランより洗礼を受ける。いとこの糸子と肉体関係があり、許嫁がいる糸子とずるずるとその関係が続いている。推定は21歳。

はっきりした理由は定かではないが、大学3年目の冬に地元の仁川（兵庫県、宝塚の東）へ帰省する。叔父の病院の手伝いを水曜・金曜で行う。

家は一軒家のようなが、両親の気配はない（物語の中で具体的には語られていない）。爺やがいる。

小説はブロウ神父へのミノルの手紙という形で構成されている。そのためか、時間軸があやふやで、思いつきのエピソードが急に挿入され、注意深く読まないことには物語の有機性が失われてしまう。

・デュラン（ピエール・デュラン）

もう一人の主人公。はっきりした年齢は書かれていないが老人。キミコと肉体関係を持ち、教会を追われた背徳の神父。リウマチで足を引きずるように歩く。「散在する古墳」の近くに家がある。林の中の家、といった印象だ。キミコと暮らす。

自殺のためのピストルを持っており、それが事件につながっていく。

ブロウ神父の援助を受けて（月に約百円、かなりの額？）暮らす。

ミサには隠れて出席している。信徒から冷たい目で見られている。

クリスマスの夜に空襲で死ぬ。……ネタばれではなく、冒頭で語られる事実です。

小説はミノルの手紙と、デュランの日記を交互に紹介するかたちで進行していく。ミノルの視点とデュランの視点があることで、ひとつの物語を双方向的に描く。これは後の氏の作品、「火山」でもとられている手法だ。

・ブロウ神父

神父。ミノルが仁川に帰省した際、残っている二人の外人の一人がブロウ神父。もう一人はデュラン。

ある事件をきっかけにクリスマスの日に高槻（大阪府）の収容所に移される。高潔でまじめな神父。

デュランの後輩だった。年齢は50歳近い。

ミノルの手紙、デュランの日記での告白はブロウ神父への語りかけがメインだが、ブロウ神父についてはほとんど語られていない。セリフもほとんどない。

ミノルと佐伯（糸子の許嫁）とはミサで侍者をつとめた仲だった。

・糸子

ミノルのいとこ。佐伯の婚約者。聖母女学院の学生。

戦争のため（学徒動員か？）川西の工場（軍需工場、詳細は不明）で働く。

胸に聖母のメダイユ（フランス語、イギリス語でいうところのメダル。不思議のメダイ、と言われている）を身につけている。

日曜日に川西工場の仕事の後、ミノルの家に行き抱かれ、駅まで送ってもらい家に帰るのが習慣になっている。

・キミコ

デュランの内縁の妻。30歳。

22歳の時にデュランに施しを受け、助けられる。貿易商のトルコ人との間に不義の子をみごもっていた。

子供がどうなったのかは語られていないが、死産だったと思われる（生まれた、死んだ、育てたの描写はない）。

なにかあると「なんまいだぶ」と呪文のように繰り返す。

デュランから時々殴られる。

地味だが、小説の主題としてはかなり重要な役割を果たしており、無視できない存在だ。

・佐伯（さえき）

徴兵により、三重県の津に入隊。急遽鹿児島の特攻隊への編入が決まり、クリスマスに一日だけ仁川へ帰り、糸子と会う約束をしている。小説には話の上でしか登場しない。

・メギン

イギリス人。どんな罪を犯したかは知れないが高槻の収容所につかまっている。デュランと2度会って会話をしたことがあり、そのつながりと信徒からの投書からデュランは警察にマークされる。

○ 時間軸

回想の中で行き来するエピソードを時間軸で並べ、物語を有機的につなげていこうと思います。

読んでいて、それぞれのエピソードがその時間軸上で展開されているかを確認するものとして有効になるでしょう。

また、内容が矛盾する点がありますが、そこは遠藤周作自身のミスであると考えられます。

夏目漱石の「こころ」にも見られますが、作品を書いているうちに物語が膨らみ、完成度が上がり、結果、書き出しの設定との矛盾が生まれるという現象です。

可能な限り、具体的な日付を入れ、時系列順に出来事を追いました。

小説を読みながら、そのエピソードはどの時間軸上にあるのかを確認しながら読むことで、内容の理解につながるかと思います。

<時間軸>

・昭和8年 デュランが日本へ来る。

↓

・昭和8年(?)頃 ミノル8歳。背徳の神父、老人のデュランに対し、仲間と石を投げつけたりする。
ミノル、糸子とデュランの家の近くで「聖家族ごっこ」をして遊ぶ。

↓

・昭和12年 9/11 関西の風水害
9/14 デュラン、キミコと出会う。
9/17 キミコ、デュランの教会へ来て、タミ婆さんと共に暮らし始める。
9/24頃 キミコの妊娠が分かる。
**キミコをタミ婆さんのところへ行かせる日、デュランはキミコを犯し、教会から追放される。

↓

・昭和15年 デュラン、自殺用としてピストルを手に入れる。

↓

・昭和18年 4月 ミノル、四谷の医学部へ入学。仁川を離れ東京へ。
8月 仁川へ帰省。初めて糸子と肉体関係を持つ。教会へ行った際、ブロウ神父にカトリック信者としての話をあわせる。
冬 ミノル、血痰を吐く。
**一週間後、行き倒れの老人を見つける。

↓

- ・昭和20年 10月頃 ミノル、仁川へ帰省。しばらく仁川で生活を送る。残っている外国人はデュランとブロウの二人だけと知る。
- 11/10頃 メギン、高槻の収容所から大阪（市内か？）へ移される。
- 12/5 デュランの日記、始まる。
- 12/17 ミノル、デュランと再会する。デュラン、ミノルへピストルのことを語る。
- 12/20 デュラン、ブロウの書斎へピストルを置きに行く。デュラン、そのあとにミノルのところへ行く。ミノル、患者の死に立ち会う。
- 12/22 デュラン、警察へ投書。
- 12/23 デュラン、ブロウに会いに行く。ピストルを隠した戸棚を確認する。ミノル、糸子から佐伯が25日に一日だけ仁川によること、佐伯が特攻隊に配属されることを知る。知りながら糸子を抱き、はじめてかすかな胸の痛みを感じる。
- 12/25 ブロウ、警察に捕まり高槻の収容所へ連行。デュラン、ミノルへ日記を托す。川西工場への空襲、仁川の町が焼ける。ミノルの家、半壊。糸子、デュラン、死ぬ。ミノル、ブロウへ向けて手紙を書く。

○ ストーリーガイド (1)

今回は章ごとの重要なエピソードを書いていきます。過去を思い出しながら書く手紙という形式のため、時間軸がいたりきたりすること。その時間軸の表記が「一昨年」であったり「昨日」であったり「その一週間後」であったりするために、非常にとらえにくいものになっています。ある程度整理した流れで表記しておりますが、細かなつながりを<時間軸>と合わせてご覧いただくことで、より有機的なつながりが見えてくることでしょう。

○ I (ミノルの手紙)

・ B29が行った川西工場への空襲より2時間後、ミノルはブロウ神父への手紙を書く。

↓

・ 東京、医学部生としての生活をつづる。

↓

・ 冬、血痰を吐く。一週間後、行き倒れの老人を見つける。

↓

・ 仁川へ帰省。徴兵等から逃れる理由もあり、叔父の病院を手伝う。約2ヶ月、一度も病院へはいかない。

↓

・ 糸子を駅へ送る帰り道。子供の頃(8歳くらい)、糸子と共に「聖家族ごっこ」を行った「この辺に散在する古墳の一つ」という場所のことを思い出す。そこにはデュランの家がある。

↓

・ デュランの家へふらりと向かう。家の前で警察に呼び止められる。ミノル、デュランに用事があると嘘をつく。デュランの家の呼び鈴をならす。

○ II デュランの日記

・ 12/5 ミサの帰り道。過去に自殺のために手に入れたピストルについての回想。

↓

・ 12/8 不倫の告白、ユダへの追想。西宮の刑事が教会に来ていたことを知る。

↓

・ 12/9 ブロウ神父と司祭館へ。ブロウ神父の「プライベートなお金」から百円札をもらう。このお金でデュランは糸子と生活をしている。警察の話題。聖母女学園のイタリア修道女が高槻の収容所へ連行されたことを知る。

↓

・ 12/10 キミコとの出会いを回想。

↓

・昭和12年9月11日 出張中、関西の風水害に見舞われる。行く先の教会で一泊。

↓

・9/12 被害状況を知る。

↓

・9/14 キミコと出会う。困ったら教会に来るように所在地のメモを渡す。

↓

・9/17 キミコ、デュランの教会に来る。タミ婆さんの手伝いをして住み込む。

↓

・一週間後、キミコの妊娠が分かる。キミコはトルコ人の貿易商のメイドをしていた。その時にトルコ人の子を孕んでいた。噂が広がり教会に通う信徒からキミコは冷たい目で見られ始める。それにつれ、デュランも冷たい目でみられはじめる。

↓

・タミ婆さんが家の事情で教会を去ることになる。キミコはタミ婆さんに預けることになったが、その引越する夜、睡眠薬を飲んで倒れている。デュランはそれを発見し、その夜にキミコを犯す。

※布団に寝かせたキミコが、デュランをじっと見ていた。そこからの「告白」はデュランはしていない。キミコのどこに欲情したのか、デュランの心象風景はどうだったのか？ それについてはまったく日記には書かれていない。そのため、問題のデュラン不倫行為に対して謎が残るのだが、小説としては「本人の日記」ということを考慮すると、デュランが自分の恥をあえて書く必要はなく、過ちをどのタイミングで犯したか、それについては告白しているわけなので、そこが逆にリアリティを加えているとも考えられなくもない。謎の解決より、小説の完成度をとったのかも知れない。

↓

・12/10 (続) 回想より、現在へ。キミコの帰りが遅いため、迎えに行く。駅に行ってもキミコはいない。しばらく待っても帰らないため家へ戻る。家の門の前で警察に声をかけられる。家に入るとキミコが帰っていた。家では異変があり、ピストルを隠している手文庫の位置が変わっていた。さらにふたが開いていて、ピストルがのぞいている。誰が触ったのか、わからない。キミコにたずねても、答えない。

○ ストーリーガイド（II）

（I）では主に事件の導入部分、ミノル、デュランの背景についてのエピソードがつづられています。

（II）ではミノルとデュランの接触、事件と物語が進展していきます。

ミノルの視点、デュランの視点でそれぞれの本音と建前が語られる対のエピソードが物語の厚みを持たせます。

ではすすめて参りましょう。

○ III （ミノルの手紙）

（「I」の続き。デュランの家に行き、呼び鈴を鳴らすところから）

・呼び鈴を鳴らし、デュランに刑事が近くに来ていることを告げ、家に入り会話をする。デュラン、3日前に有馬に買い物に行った際、何者かに家を調べられたことをミノルに話す。デュランの話では、刑事が留守中に勝手に入り、家の中を調べたのではないかということだが、ミノルは俄かに信じられない。物取りではないかということ、デュランは首を振る。デュラン、金庫にしまっているピストルが調べられていたことを言う。ピストルはブロウから預かった、とはなす。

↓

・デュランの家を出て、ミノルはデュランのこと、ピストルのことをブロウに言うべきか悩む。が、言えない。

↓

・ある日、仕事に病院へ向かう際、デュランの家の裏手にある松林を通る。そこで警報が鳴り、グラマン機が飛んでくる。ミノル、グラマン機に狙われ（ミノルの主観）撃たれる。ミノル、防空壕のような古墳の中に入り、難を逃れる。

○ IV デュランの日記

・12/15 子供の頃のリヨンでのクリスマスを思い出し、絶望する。キミコを殴る。

↓

・12/16 夜、家の外で徘徊する足音を聞く。何物かは長い間そこにいた。

↓

・12/17 ミノルがやってくる。保身のため、ピストルはブロウから預かったと嘘をつく。キミコはそれを見ていて何も言わない。

↓

・12/18 キミコとの会話。神を棄てることで罪悪感を感じなくなる”感覚”に気付く。デュラン、黄色い人（=日本人）のキリスト教への意識、罪悪感についてはじめて理解できた気がする。

↓

・ 12/20 ブロウの書斎にピストルを置きに行く。約10分間の冒険。硝子戸の書棚に置き、出てくるが、あわてていたため、書棚の戸を閉めてきたのか覚えていず、不安にさいなまれる。

○ V (ミノルの手紙)

・ 12/20 学生の患者が死ぬ。死亡証明書を代筆。その日の夕方、デュランがミノルの家にやってくる。患者が死ぬ際のエピソードが挿入される。デュラン、ミノルへ話したピストルのことを口外されないよう、婉曲に取引を持ちかける。半ばおどしをかけ、デュランは去る。

↓

・ 12/23 糸子から佐伯が福岡の特攻隊に配属になると知らされる。佐伯が25日(クリスマス)に帰ってくることを知る。それを知りながら、ミノル、糸子を抱く。この時、初めて胸にかすかな痛みを感じる。――物語のまとめ。

↓

・ 同日 ブロウ神父に伝えようと”自分の意思で初めて動き”、教会へ。しかしブロウ神父は宝塚へ行って留守。伝えることができなかった。

○ VI デュランの日記

・ 12/21 デュラン、ピストルを置きに行った際、書棚のガラス戸を閉めたかどうか、思い出して見る。考えれば考えるほど、隠した場所はブロウ神父から見つかりやすい場所だったと思い、墓穴を掘ったと後悔する。デュラン、ミノルと会話を交わしたが、彼は自分の言葉を信じていないと思う。

↓

・ 12/21 キミコのささやき(デュランの妄想か?)。その声につられ、デュラン、ブロウ神父をさらに陥れるべく、警察への密告の手紙を書き、投函する。密告者が悟られないよう、新聞紙の字を切り抜き、作成。

↓

・ 12/23 デュラン、ブロウ神父に会いに行く。書棚の状態を確認することが目的。話しながら、書棚を確認し、触った形跡がないことをみとめる。お金をもらい、別れ際、ブロウ神父より意味深な言葉を投げかけられる。帰り道、橋の上で自分の地獄での姿を見る。サイレンが響く。

○ VII (ミノルの手紙)

・ 12/25 ミノル、病気が悪くなっていることを自覚。午前中、少し寝る。

↓

・ 午後、目が覚めると枕元に糸子がいる。糸子、ブロウ神父が捕まったことをつげる。

↓

- ・糸子は佐伯のことを話すため、教会へ赴いた。そこで拘引されるブロウを見る。ブロウ神父は”まるで自分の運命を知っていたかのように”連れて行かれた。

↓

- ・夕方4時に佐伯が来る、そう言って拒む糸子をミノルは抱く。

↓

- ・警報が鳴る。避難を促すアナウンスが流れる。家の外で気配があり、ミノルが確認すると、それはデュランだった。デュランは日記を置き、逃げるように去っていく。日記にはメモがあり、自分の日記をブロウ神父に渡して欲しいという依頼が書かれていた。

↓

- ・家に帰る時、空襲に遭う。家が壊れる。デュラン死ぬ。糸子、血を流し気絶している。

↓

- ・二時間後、ブロウへの手紙を書き終わる。手紙は”日本人と白人のへたどり”を述べて締めくくられる。

○ アクトガイド

ストーリーガイドにて、ストーリーの進行を端的にまとめていきましたが、これだけではまだまだわかりません。読みながら、今どういう話なんだろう？ と確認するには有効かもしれませんが、主人公たちの行動（アクト）の理由はいまいちわかりません。特に重要と思われる主人公たちの行動の動機について、推測も交えてガイドいたしましょう。

A：ミノルが仁川へ戻ってきた理由

第2次世界大戦の最中、戦局は著しく悪化の一途をたどり、その中で病で自分の命がそう長くないと悟ったミノルは、“動きたくない（第5章より）”と思い仁川へ戻る。戦争にかり出されるのが嫌で、叔父の病院に週に2日という中途半端なタイミングで通い、カモフラージュし、出兵をまのがれる。働かない日はほとんど糸子と寝るか、ベットで過ごすか、文字通り“動かない”生活を送っています。

それをデュランにつつかれ、“密告して世間から誹謗中傷を受けるか？”と脅されるわけです。

ミノルは自らの病気によりネガティブになっており、未来への希望を見失っている。“動かない”というのは、“未来に対し建設的な行動をとらない”という意味です。

B：ミノルがデュランの家に寄った理由

デュランの家の近くを通りかかった時、子供のころを思い出し、好奇心でデュランの家を見つめようと思ったのです。ミノルはデュランがまだ仁川に住んでいることを知っていました。そんなデュランが今、まだ昔のまま、同じ場所に住んでいるのか（その情報も知っていたかも知れませんが）、さしてやることなく退屈しているミノルが食指を傾けるのに難しくない理由だと思います。

しかしここで誤算があります。ミノルが家に近づくと、警察に呼び止められるのです。ミノルは咄嗟に嘘をつく。その嘘のために、デュランの家の呼び鈴を鳴らさざるをえなくなる、という墓穴を掘ります。

これが思いがけず再会を果たし、デュランがさらに罪を犯すきっかけになっていったのです。

C：デュランがピストルを置きに行った理由

デュランはミノルにピストルを持っていることを話してしまいます。警察にマークされている自分がピストルを持っているということを知られるのは非常にまずい。そこで「ブロウ神父より預かっている」と嘘をついてしまう。これが誤算でデュランはドツボにはまっ
ていきます。

ブロウ神父より預かっている、ということを正当化するために、デュランは教会へ闖入し、ブロウ神父の書棚へピストルを隠すことにするのです。そうすることにより、自分に嫌疑がかけられても「私のじゃないです。確かに一時持っていました。持主はブロウ神父です。証拠に、彼の部屋を調べれば出てくるはずですよ」と言い逃れできるから。けれどそうはうまくいかないのが”純文学”のいいところです。

デュランは書棚に隠したのはいいものの、急いでいたために閉めたかどうか、記憶が怪しくなる。

さらに考えれば考えるほど、自分に不利な状況を作ってしまったと気付きます。

そこでミノルが警察か、ブロウ神父にピストルのことを密告する前に、警察に捕まえさせようとする。

それが新聞を切り抜いて書いた密告の手紙。これにより、ブロウ神父はクリスマスの朝、警察に捕まります。

デュランがミノルにピストルのことを話した理由は、デュランの留守中、何者かにピストルを調べられていたから、それをどうにかしないと危ないと、考えていたからかも知れません。

○ リドルガイド

この小説の物語には直接関係がないものの、うまく設定されていると感心できる場所があります。謎（リドル）というわけではないですが、興味深い部分を抜き出し、解説いたしましょう。

a : 物語の舞台に仁川を選んだわけは？

第一章（作中の”I”）より一部抜粋しながら表現してみましょう。

仁川は ”芦谷や御影に住む余裕のない階級が、阪急と当時両行の住宅会社の宣伝とで、いかにも成り上がり者の好みそうな、外観だけは派手な和洋折衷の家を競って作った”地域。

続く本文にはこうあります。

”日本の土地にありながら、にせの異国風景をいかにも小賢しく作り上げた仁川は、黄色人のくせに母や叔母の手によって、貴方の教会の洗礼をうけさせられた自分にそっくりでした。”

この小説の主題を表現するには、地域としても、構図としても最も適した場所だったのでしょう。

b : デュランの家を調べていた人は？

もし警察が家を調べていたなら、ピストルを持っているのをばれていたわけですから、はやい段階でデュランは警察に捕まっていたはずですが、しかしそうではなかった。警察がデュランを調べていたのは犯罪者メギンと会ったことがある（接点があった）から。ちなみにメギンは何者で、何をやったのかは不明です。

デュランの留守に家を調べ、ピストルを持っていることに気付いた人物。その人物は、その後もデュランに気をかけ、家の周りをうろうろしたりするわけです。

それはずばりブロウ神父です。

その裏付けは第6章の、デュランがブロウと別れる際の言葉に表れています。

c : なぜクリスマス日に空襲が起きたのか？

もしも仲間の国の国民が住んでいたら、仲間を殺すことになってしまいます。

ミノルが仁川へ帰ってきた時、残っている外国人はデュランと、ブロウの二人だけでした。

デュランはすでに教会を追われ、国籍も日本であり、どうでもいい存在だったと思います。けれども真摯な聖職者、ブロウ神父を共に攻撃するには気がひけたのではないのでしょうか。

ブロウ神父がデュランの謀略にかかり高槻の収容所へ運ばれた日の夕方——つまり仁川から”外国人”がいなくなった時をみはからい、空襲が始まった。

これは計算されたことだったと考えられます。

○ おわりに ～～楽しみ方ガイド

芥川賞を受賞した『白い人』という作品があります。この小説と対で文庫化されることが多い『黄色い人』。どうしても『白い人』と比べると影が薄く、ストーリーもよくよく読み解いていかないと理解することが難しい内容なので、人気のない作品かも知れません。その点、『白い人』はナチの拷問、カトリック思想への反骨のように生まれた悪を主人公が演じる、刺激的で軽く読むだけでもそれなりに面白く、さらに深く読み解くと宗教倫理観への問題定義なども見え、堂々と脚光を浴びるにたる作品でした。

けれども、私はあえて『黄色い人』を推します。『白い人』よりも日本人として深く考えさせられる作品だからです。また、この『黄色い人』は後に続く長編『火山』でダイナミックな進化を遂げます。もちろん物語はまったく別物ですが、デュランとキミコの関係、ミノルと糸子との関係。ミノルとデュランの物語をデュアルに展開する構図、その接点から物語が大きく動くところなど。『黄色い人』との相似点が多いためです。背徳の神父、デュランは同じような設定で、同名で登場しますしね。

私がこのガイドで書いたことはあくまで小説の骨の部分だと思っています。そのまま読んでも骨が分からず、読後もなにがどうだったのか理解できない、という状態ではせっかくこの小説で描いている本当の意図が十分に楽しむことができません。

ミノル、デュランの心理を読み解いていくことも大切で、それがメインでもありますが、見逃せないのがキミコと糸子の心理です。ぜひシュチュエーションを理解し、彼女たちの気持ち、どうして墮落していったのかを冷静にみていただきたいと思います。

女性の心の中は神秘ですね。

遠藤周作はエッセイの中で「女性を描けて作家は一人前といわれるが、僕は苦手だ」というニュアンスのことを書いていましたが、遠藤周作の描く女性は他の作家と比較しても秀でていていると思います。「女の一生」もそうですね。こちらはわかりやすく丁寧な小説になっています。

○ おまけ ～～課題と押さえておきたい矛盾点

作品を楽しむための課題を少し提示しておきたいと思います。

これを考えながら読むことで、より作品を深く鑑賞できると思います。答えはありません。自分の視点で自由に想像して楽しむことこそが、文学の”遊びかた”なのです。

○課題

- ・糸子がミノルと逢引きする理由。糸子の心理について。
- ・キミコがデュランと共に暮らす理由。暴力をふるわれても出て行かない心理について。
- ・ほぼ語られていないプロウ神父の心情はどうだったか。
- ・敗戦間際の一般市民の心情。
- ・キリスト教布教が日本に於いてなかなか理想的な広がり、理解が得られない理由。

○矛盾点

細かな点は抜きにして、単純ミスと思われる部分と作品の存在理由を揺らがせかねない危ない部分をピックアップします。

・冒頭、このミノルの手紙は昭和20年12月25日に書かれているはずなのですが、この手紙でミノルが書こうとしていることは『今年の寒かった冬のこと、デュランさんと会った夜、貴方が西宮の特高につれていかれた朝のことをカンタンに』書くと記述しています。注意深くみると明確な記述ではないため”今年の寒かった冬”というのは、昭和19年の冬を指していると考えられますが、あくまでミノルの手紙は昭和20年の9月頃（ミノルが仁川に戻ってきて）からの話を書いています。そのため19年の冬から描かれていけば矛盾はないのですが、20年9月からの話なので、これは矛盾しているということになります。恐らく遠藤周作は冒頭1月頃の話として書き始めたのですが、書いているうちに12月25日のクリスマスに運命的な事件が重なることがよりドラマティックになるという、偶発的な帰結を迎えたので、冒頭の矛盾を差し置いて、力押しに書きあげたのだと思います。

これは作品を書いていると、割によくあることです。今はだいたい冒頭の内容を修正するんですけどネ。

・仁川に空襲が起きたのが昭和20年12月25日となっています。これはデュランの日記より推測した日時です。8年前にキミコと過ちを犯したのが昭和12年9月。つまり8年後の作品舞台は昭和20年のはず。ですが、ここが非常に重要な点なのですが、昭和20年8月に日本は終戦を迎えます。”耐工難キヲ耐工”昭和天皇がラジオ放送で敗戦を告げ、日本はもうこれ以上戦う必要が無くなった。つまり、昭和20年12月に空襲が起きることはありえないのです。群馬・前橋への空襲など、一部戦後に起こった空襲があっ

たという話は聞いたことがあります。それはよいとしても、糸子の婚約者、佐伯は特攻に出ることになっていますが、戦争が終わり、神風特攻隊が編成される必要はありませんので、やはり矛盾点と云えるでしょう。

恐らく正しい設定は昭和19年12月なのでしょう。そう、それなら先の矛盾も解けてくるのです。昭和20年1月に書かれたのが”ミノルの手紙”であれば、まだ戦争中で神風特攻隊（敗戦間際）も編成されるし、空襲も起きる。つまりデュランの手記の中での月日を明確にした手紙に誤り（恐らく、単純な作者のうっかりです）があり、話に矛盾が生まれてきているのです。

だからと言って作品の価値が下がるわけではありません。こういう矛盾やミスも含めて鑑賞することが文学の面白さでもあります。

島田荘司が「占星術殺人事件」の中で、コナン・ドイルのシャーロックホームズの作品群について、矛盾点を指摘しまくるのだけれど、実はそれは作品へのリスペクトであったりします。「占星術殺人事件」から生まれた名探偵・御手洗潔とその付き人的な作家・石岡和己は、まさにシャーロックホームズとワトスンの関係です。

閑話休題。

『黄色い人』を純粹に作品として深く楽しんで、後の遠藤文学をさらに深く理解する一助となれば幸いです。

<付記>

―― 『読解・黄色い人』上梓後、新たに分かったことをここに付す。

○ メギンの謎について

作中にほとんど説明もなく突如登場し、そのままおざなりになる人物としてメギンがいます。彼はどのようにしてこの小説に登場したのか、必要であったのか？

新約聖書に通じている方ははっと思い当たったかも知れませんが、一般の読者では恐らくこの謎を解くことはままならないでしょう。私も偶然、遠藤周作の『イエスの生涯』を読み返す中でようやく気付くことができました。

新約聖書の中の “受難物語” と括られるくだりがあります。

イエスが捕まり処刑される一連のエピソードがそれですが、その中でバラバという囚人が登場します。

イエスは裁判にかけられ一度無罪として判決を言い渡されますが、民衆の暴動をに回避するため “このバラバの身代りに” 磔刑にかけられることとなります。

ではこの “バラバ” とはいかなる人物か？

それについては聖書ではほとんど語られていません。

「バラバは都で起こった暴動と殺人のかどで獄に投ぜられた者である」

「バラバという評判の囚人」

「暴動を起し人殺しをしてつながれている暴徒」

「このバラバは強盗（革命家）であった」

これのみであると、『イエスの生涯』では書かれています。

急に突然 “話の中だけで登場” し、“詳しく説明がなされない” こと。

また、“その後どうなるかなどを含めおざなりにされている” 点を考えると、聖書に登場する囚人バラバは、『黄色い人』に登場する囚人メギンと完全に一致します。

つまり遠藤周作はバラバのオマージュとしてメギンを作中に盛り込んだと結論できます。

また、それにより聖書を視点とした次の事実が浮かび上がります。

○ 『黄色い人』は『受難物語』のオマージュである。

背徳の神父デュランはイエスを裏切った “ユダ” を連想させ、
高潔な神父ブロウは “イエス” を連想させます。

人としての弱さゆえに罪を犯し続けるデュラン。

ピストルの件により、デュランはブロウを嵌め、警察に逮捕させます。これはユダがイエスを少ない金銭で売り払ったことに類似しますね。

また、ブロウは “ そんなデュランの所業を知りながら ” あえて黙って警察に捕まり、その裁きに身を委ねます。一言もいい訳もせず、デュランを攻めることもなく。

ブロウが拘引される場面を見た糸子はこう表現しています。

「……びっくりしている信者たちをみて微笑されているよ。まるで……」

「まるで御自分の運命を御存知だったみたい」

聖書に通じる人には、この描写を読むとイエスを連想せざるを得ないはずで

『黄色い人』という第2次世界大戦を舞台とした悲劇的な物語は、『受難物語』をモチーフに置き換えて表現されたものであったと言えるでしょう。

○ 余談ではありますが……

この作品に限らず、『聖書』を読み説くことによってはじめて読解できる本が世界にはたくさんあります。

『聖書』を読むことでそれらの物語を深く楽しむことができる、それは間違いのないことなのですが、

これは逆に考えると “ 『聖書』 を読み説くためにそれらの作品が小説として存在している ” と考えられるかもしれない。

『イエスの生涯』はそんな発想を私に与えました。

これは大変衝撃的な、私の今までの読書人生の意味を一変させるほどの読書体験でした。

——どう考えるか、ご判断はあなた次第です。